

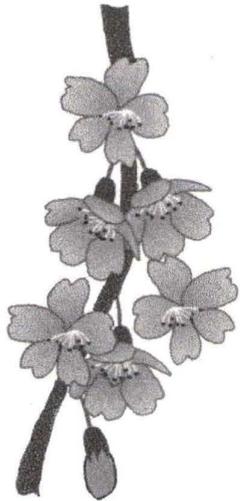
趣味の広場

桜三昧

二十回生 井出（藤川） 敏

小学校三年生から高校二年生までの約九年間暮らした佐井寺・千里山は私にとって今も一番懐かしい土地で、子供時代の思い出が沢山あります。六月の「ちさと会」にも出席させていただき楽しみがある昨今です。

同期の久保利也様のおかげで、厚かましく『千里山』誌には四号より毎年拙歌を出させていただき早や十年が過ぎました。以前『富士山』のことを掲載させていだいたことを思い出し、今回は古来より「花の王」と云われ国花でもある「さくら」に関する短歌にしました。我々関西人は「さくら」と云えば、矢張り吉野を思い出すことが多いので、吉野へ行った時のものと、他の桜に因むもの数首を出させていただきました。



「吉野山七首」

着飾りし稚児行列の母と子の姿うるわし吉野の真昼

毛槍あぐ奴の足どりかろやかに聖天の前より出でゆく行列

天武帝ゆかりの寺にひとときを憩う佳き日よ桜三昧(桜本坊)

開け放つ窓より見さく爛漫の桜花に酔いぬ「中の千本」

法螺貝の音色ひびかす山伏の下山の列に桜花こぼれる

花会式の準備ととのう前庭の組まれし護摩木にさくら舞い散る(蔵王堂)

道筋の店々覗き求めしは吉野の葛とさくらの茶杓



「雑詠七首」

頼朝が駒を止めしと伝え来し千年桜をしみじみ仰ぐ(駒止桜) 静岡・富士宮

花びらの踏みしだかれしきざはしを登りて対う啄木の歌碑 北海道・小樽

(こころよくわれのはたらく仕事あれ それを仕遂げて死なんと思ふ 啄木)

うすべにの桜花が時折一面の霧の中よりすがたあらわす 和歌山・高野山

足病みて詣れぬ母に奥津城の彼岸桜を手折る老い父 三重・志摩

娘の安産 見とどけ帰る道すがら夕影に染む桜花を見上ぐ(靖国神社) 兵庫・神戸

ポトマックの河岸にふるさと忘れずに咲き初む桜愛でる好日

米国・ワシントン(日米親善百周年に)

池の面に夕もやたちて対岸の桜は淡きくれない保つ 大阪・狭山
(日本最古の人造池)

